

食教育からみた子どもの食・家族・地域

足立己幸（女子栄養大学）

子どもの食生活をめぐる問題点が多々指摘され、その原因や背景の一つに家庭における食の乱れや家族との関係が密接でない状況があげられる。こうした状況の成立にかかわる要因の一つとして、食教育の場で具体的な「家族の食事」像を育てるような教育の枠組みになっていない点を問題提起したい。教育内容の全体的、直接的な反映である教材に注目する。

(1) 栄養素選択型栄養教育の基本的な枠組みである「栄養所要量」、食材料選択型栄養教育の「食品群」や「食品構成」共に具体的なデータは一人一日単位である。一方、日常的な食材入手、調理、食事づくり等食事づくりの諸行動は家族単位で営まれる。そして必ずしも一日単位ではない。(2) 熟通いなど子ども自身のライフスタイルの多様化が進む中で、家族との共食や異世代の人々との食情報の交換の機会が漸減しているの、家族の食の営みの具体的なイメージを得る機会が少なくなっている。

(3) 食事を作る、準備する機会も減少している。「作る」が「調理」に矮小化して扱われる中で子どもたちの「食事」ばなれ。(4) 食事の自立、自立的な食事を営む力は家族や仲間達との食事の営みの中に、自分の食を位置づけつつ形成されると考えている。社会や家族から孤立してとらえられる食事と自立的な食事の混同はないか。

(5) 親子関係、家族関係、友人関係、地域とのかかわりでの食の形成や構築自体に焦点を当てた発達の視点の重要性。